CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

『青空』同人のこと（その二）

――浅沼喜実――

唐井清六

『青空』同人のなかで、浅沼喜実ほど波乱に満ちた人生を送ったものはないであろう。それは自身考えてもみなかったはずのものである。彼の『青空』への参加は第四号（大正十四年六月）からで、このとき十九歳。『青空』同人中最年少である。それよりまえ大正十一年、三高入学のさい中折帽をかぶった人がいて附添いだろうと思ったら、のちにそれが三好達治とわかって驚いたというのはおもしろい。（「私の歩んだ道」昭和五十九年七月二十二日～八月二十一日『日本海新聞』）ちなみに三好は陸軍幼年学校を卒業して、一時軍務についたりしてまた陸軍士官学校に入学、中退するなどのまわり道をしていてこのとき浅沼より六歳年上の二十二歳であった。

明治三十九年一月二十九日、鳥取市川下町（現在相生町）に生まれる。父は小学校訓導、県視学、東伯郡長、西伯郡長などを務めた名望家、教育に理解のある、不自由のない家庭で育つ。小学校、鳥取中学（のちの鳥取一中）を優秀な成績で卒業。三高へは中学四年修了からの飛び石入学である。いわゆるガリ勉タイプとはちがい中学では剣道部でも活躍している。秀才である。剣道は三高に入ってからも続けて三年次にはキャプテンになったりしているが、同時に中谷孝雄、梶井基次郎らが主宰する劇研究会のメンバーにもなる。文芸への接近である。このグループは大正十二年、同志社女専（いまの同志社女子大）の生徒二人に加わってもらい公演を企てるが、前日校長から

中止命令が出て口惜しい思いをする。この程度の男女の交流も認められない時代だったのである。しかし翌十三年、舞台を京都から鳥取の静修女学校講堂に移して実現する。鳥取は浅沼の郷里であるから彼の働きが大きかったのかもしれない。このときも女の先生のつよい反対があったが、遠藤校長の英断で実現の運びに至ったという。この遠藤校長は本学の初代学長遠藤嘉基の祖父遠藤董である。遠藤董はすぐれた教育者であると共に絵をよくし、高橋由一に油絵を学んだりした、鳥取におけるこの方面の先覚者でもあった。

谷崎潤一郎「お国と五平」、山本有三「海彦山彦」などが上演されるが、賛助出演した女性のひとり長谷川清子は、のちに浅沼の妻となる。

大正十四年四月、浅沼は東京帝国大学法学部政治学科に入学。文科畑でないのは、外村繁の東大経済学部、清水蓼作の京都市立絵画専門学校（現在の京都市立芸大）などと共に『青空』同人中異色である。本来は文科に進みたかったのを、浅沼の将来を考えての父の勧めにしたがったのである。しかし法律の勉強には興味がなく、文学に熱をあげる。入学と同時に、生涯親交を結ぶことになる、仏文に入った淀野隆三と共に『青空』同人となる。『青空』はこの年一月に創刊されていて、その中心メンバーである梶井基次郎、中谷孝雄、外村茂（繁）らとは三高劇研で旧知の間柄であった。浅沼の作品が『青空』に載りだすのは、さきに書いたようにこの年六月に出る第四号からであるが、以後昭和二年六月、第二十八号で終刊に至るまで浅沼はほとんど毎号のようになにかを寄稿している。そのいくつかを見てみたい。

「咳ばらひ」（『青空』第四号・大正十四年六月）はいわば浅沼の『青空』でのデビュー作。退役した巡査が主人公、彼は妻と養子と三人暮しであるがそのあいだはしっくりといってない。彼は気まずいその場から逃れるように路地伝いに行ける伯父の家をよくたずねる。彼はときどき咳ばらいをするのが癖である。老境にさしかかった男の孤独な姿を描いてなかなかの佳作。

「二つの場面」（『青空』第五号・大正十四年七月）では、ある小さな町、そこでの《唯一の衆議院議員選挙権所有者である》大森邦輔とその妻、二人の男の子、一人の女の子との歳末の夕餉の風景が描かれる。彼らにはもうひとり女の子がいたのだが、四つの年に不慮の事故から死なせている。話はいつしかその子にまつわる憶い出となってゆく。場面はそれから十数年後のある大晦日の晩にかわる。邦輔夫婦は頭に白いものがめだつ《一層人のいい睦じい老夫婦》となっている。長男の娘である孫をふたりは可愛いがり、奪い合っている。孫娘は亡くした長女と同じ四歳である。夫婦の思いはしぜんまた長女のほうへとむかう。

《年末（くれ）の三十日の晩である――》という書き出しからして志賀直哉の「好人物の夫婦」を思わせる。孫娘が志賀夫人と同じ康子の名前になっているのもたんなる偶然とは思えない。

「〝池の端〟の夢」（『青空』第六号・大正十四年八月）は、降りみ降らずみの頭の重い日、新薬師寺の池のほとりでの幻想。姉弟の約束をした女との官能的なにおいのする会話もでてくる。これも志賀直哉の夢を扱った「イヅク川」などの作品を連想させる。

「プロマイド買ふまで」（『青空』第八号・大正十四年十月）は、自分が恋している女性にプロポーズすることはおろか、彼女によく似た女優のプロマイドを買う勇気も出ない主人公が、友人をさそってそのプロマイドを思い切って手にいれるまでの心理的経緯を描く。今日では考えられないような旧制高校生の純情が書きとめられている。

「秋の小品」（『青空』第九号・大正十四年十一月）は、「柿」と「足跡」の二篇から成る。「柿」は柿にまつわる母の憶い出。「足跡」は三高時代、二人の友人をつれて故郷に帰ったときのいかにも高校生らしい感傷的な文章。《来年は東京に行き、残る三年間の学生生活を終へた後は、あてもない浮草稼業の宮仕へをするのだと思へば》などという箇所があり、彼のそれからの人生を考えるとある種の思いにさそわれる。また《日本で一番大きいと云ふ、故郷の砂漠は……》とあって、当時まだ今日の鳥取砂丘という言葉は定着していなかったことが知られる。

「秋晴」（『青空』第十一号・大正十五年一月）は、東京で学生生活を送る主人公が、父の死により進学を断念した旧友が武道館での剣道大会に出場するため上京してきたのに会いにゆくはなし。

「序曲」（『青空』第十四号・大正十五年四月）は、私小説的な内容のやや長い作品である。《春木》が作者自身と重なる人物で、『青空』同人をモデルとしたと考えられる数人の人物が登場する。文中に《武者小路崇拝の春木》とあるように、浅沼が武者小路実篤に傾倒していたことがよくわかる。武者小路の愛好する《人類》という語が出てくるし、《青空村の空想を話した》とあるのも、むろん武者小路が大正七年から建設にのりだす新しき村をふまえてのことである。『青空』同人で新しき村のような青空村をつくろうという発想は、無邪気で稚気にあふれている。

浅沼の武者小路熱は「詩・対話」（『青空』第十二号・大正十五年二月）においてさらに一層はっきり示される。冒頭の「ほんとの喜び」など、内容からしても形の上からいっても武者小路の詩そのままである。

《ほんとの喜びは素直であることだ。／すべてのこだわりの鎧をぬぎ／すべての間違った自尊心の垢を洗ひ落して／生地のまゝの自分を曝したとき／「わたしはこれだけの値打を持ってゐます。／あなた方が、これ以上に評価なさらうと、または　これ以下に評価なさらうと／私のほんとの値打は　そのために動きはしません。」／さう云って　生地のまゝの自分を曝しえたとき／ほんとの自信と　ほんとの力と、／そして　ほんとの喜びがわく。／ほんとの喜びを知ったとき／自分は嬉しかった。／……》

「春の来るまで」（『青空』第十五号・大正十五年五月）は、高校生の頃、小学生だったNへ思いをよせ、以来ずっと思い続けていたが大学生となったいま、いよいよ思いを相手に告げようとして母や知友に相談するはなし。この内容も武者小路の一連の初恋小説を思いおこさせる。

「ふるさと、は？」（『青空』第十六号・大正十五年六月）は、同郷の同じ小学校で二年上だった女の子がカフェ

で女給になって働いていて、共に郷里をなつかしむ話。《私》は帰郷したさい、彼女に海辺で採ったぼうふを土産にしたりする。

「静かなる鼎座」（『青空』第二十号・大正十五年十月）は、三十六年と一ヶ月の公務員生活を務め終えた大森彦一が、二人の姉と五人の孫と小松原に出かけて重詰めをかこんで往時に思いを寄せるという短篇。

以上が『青空』に発表された浅沼の創作の主だったものであるが、すでに指摘したように武者小路、志賀ら『白樺』の作家の影響が顕著である。浅沼は気質的、体質的に『白樺』の作家たちと共通するものを多分に持ち合わせていたと考えられる。後年、彼が柳宗悦の提唱する民芸運動につらなる仕事に携ることになるのも、当然のなりゆきであったかもしれない。

これらの作品を発表するかたわら、浅沼は大正十五年一月には「精神主義文学を叫ぶ」（『青空』第十一号）という論文を発表する。それは当時抬頭していたプロレタリア文学を擁護する論調であるが《プロレタリヤ文学の主張が、論理の世界に於て正しく、文学の世界にそれを引上げるためには、私達は重農主義芸術観を、経済生活の様式から離れて、心の、精神の、理想の世界に持って行かねばならない。……吾々はプロレタリヤ文学を提唱される一派の叫びを、真なりと認める。然し、破壊者は、飽まで破壊者でなくてはならぬ。破壊者は、先づ、己自身を破壊しなければならない。それでこそ、人類は、正しい意識に眼覚め得る。而して。建設は、常に、時間的にではなく、破壊と平行して行かなければならない。破壊は夫自身が手段でなければならない。破壊が完結しないうちに、建設は表はれなければならない。だが、破壊がより正しく、より力強くあるためには、破壊者と建設者とは、別個の存在でなければならない。そこに、私は、プロレタリヤ作家達が決して結局のものではなく、その意識に眼覚めた、而して、より高い理想を持った、別個の一団が現はれねばならないことを認める。》といったことが述べられていて、プロレタリア文学一辺倒ではないのである。まだ白樺文学の影響下にあることは容易にみてとれる。文中の

《重農主義芸術観》とは、生田長江が「「近代」派と「超近代」派との戦」（『新潮』大正十四年六月）に説くところのもので、浅沼はこの論文にいたく感動する。浅沼の表現を借りれば《重農主義芸術観》とは《科学もなく、商業もなく、唯、単に、農業――人類と土との美しき調和（而して、美しき調和には、常に神への感謝が伴ふ）の世界へ後退するものでなくして、科学、商業、すべての近代的産物を超克した、物への激しい厭悪から生まれた新しい世界》を渇望するものである。

大正十五年十二月、浅沼は東京帝国大学生を中心に結成された社会主義研究グループ新人会に加入する。大学二年生の冬のことである。中谷孝雄は「青空」（『群像』昭和四十四年五月号）のなかで《浅沼は今や気鋭のマルキシストであった。同人会の席などでもかなり尖鋭の議論を吐いた》と書いている。また、当時の浅沼は《風貌がトロッキーによく似ているといって得意げであった》（中谷「思い出の一端」平成二年六月）という。

昭和二年三月、浅沼は湖山貢の筆名をはじめて使い、「「社会主義文学」批判」を『青空』第二十五号に、つづいて同年五月、「自然成長と目的意識」をやはり同じ筆名で同誌第二十七号に発表する。在来のプロレタリア文学を批判する姿勢をとりながら、左傾の度合いをしだいに深めていることがわかる。前者ではマルクスの《「哲学者は世界をいろいろに解釈してきただけだ。だが、かんじんなことは世界を変革することだ。」》の言葉を引き、次のような発言をする。

《我我の文芸――新（ママ）の無産階級的世界観に立脚するところの我等の文芸は、かかるものとしてのみ認識せられなくてはならぬ。かくしてのみ、真のプロレタリヤ文芸はその役割を果し得るのだ。

我我は、プロレタリヤの仮面を冠つて、反動的役割を果しつつあるあらゆるものを、常に監視し、徹底的に批判し、分析し、排撃するであらうことを約束する。》

文章の後段はその前に書かれる《前衛の任務は、理論闘争に政治的暴露を重ねることである。政治闘争にむかつ

て大衆を組織することであり、あらゆる層の中に入りこんで、各層を現実にアヂテイトすることである。従つて、マルクス主義によつて日常茶飯事を解釈し、それを読者に示すことは、断じて前衛の運動ではない。それは小ブルジョア的自慰以外の何ものでもない。》のところに照応している。かなり過激な要素をはらんだ内容である。

ペンネームの湖山貢は鳥取の湖山池にちなんだものだが、それについて地元の詩人山下清三が「追想・湖山貢のこと」（『さすらい人の風籟』平成二年六月「浅沼喜実遺稿集刊行会」収録）で次のように書いている。

《湖山池は、伝説の池です。それは、沈む太陽を招きかえした、不逞ともいえる一人の男の、叛逆的精神から生まれたのでした。

浅沼が、湖山をペンネームとして選んだ心底には、或いは無意識かもしれないのですが、その叛逆的精神に、ひかれるものがあったのではないか、と考えられたりするのです。》

この年、浅沼は新人会での活動で二度検束され、留置場に入っている。ビラまきやデモに参加し、文学からしだいに遠ざかってゆく。読むものもレーニンやスターリンの著書にかわる。『青空』は六月、通巻二十八号をもって終刊。浅沼は時代の激しい荒波のなかに立つことになる。この頃、かねてよりつきあいのあった長谷川清子と婚約する。

昭和三年三月、東京帝国大学法科を卒業。親には卒業証書と最近撮った写真とを送り、新人会幹部の指示にしたがい新潟に赴き、オルグ活動に入ることになる。日本農民組合新潟県支部書記というのが肩書きで、農家に下宿して毎日自転車で走りまわり、小作問題の解決や組合意識の昂揚をはかろうとする。無給であったので、親の仕送りを受けねばならなかった。官僚エリートの道を歩むことを親は期待したであろうに、大きな裏切りである。

翌四年四月、さすがにこうした生活をいつまでも続けてはならないと考えた浅沼は上京、高円寺の外村の家に身を寄せていたところで警官に捕えられる。治安維持法違反の嫌疑であった。新潟に連行され、十ヶ月間の未決拘留

となる。

昭和五年二月、懲役二年執行猶予四年の刑が確定した浅沼は、迎えに来た父に連れられて鳥取に帰る。かつての孝子の面影はない。三月、上京して淀野隆三、外村繁に会う。婚約者長谷川清子もやって来て、その夜、浅沼は清子と共に外村の家に泊ることになり、ふたりは事実上夫婦となる。

浅沼は友誼に厚く、とりわけ『青空』同人との友情を大切にしているが、五月には京都へ出て清子と共に大阪住吉区王子町の自宅で病床にあった梶井を見舞っている。梶井が亡くなる二年ほど前のことになる。清子は当時、駒井玲子の名で東京マネキン倶楽部に所属するマネキンガールとして大人気を博していた。その方面の草分けであろう。マネキンガールとは今日いうファッションモデルであり、また商品を説明して販売する係員であった。やがて浅沼は同郷の人の経営する東京北品川の小さな工務店に職を得る。事務担当であった。折しも不況の嵐が吹き荒れており、こういう職を見つけることも容易ではなかったようである。しかしこの勤めも二年で辞め、ふたたび失業状態となる。

昭和七年、清子は女児を出産してマネキンガールとしての第一線を退き、独立して自分のクラブを作ることになる。マネキンガールはむろんのこと、洋裁、口述筆記、タイピスト、美術モデルなどを依頼に応じて派遣するクラブである。淀野によってファム・フォン協会と名づけられた。フランス語のファーム・フォンクション（女性職務）の略である。清子は上野で開催された万国婦人博覧会に、マネキンを使って婦人の洋装変遷史を実演してみせたりして意欲的であった。このとき考証を今和次郎、舞台装置を吉田謙吉、照明を遠山静雄に頼んでいる。そうそうたる顔ぶれである。浅沼はこうした清子の活躍を蔭で支援していたらしい。

昭和九年四月、『青空』をはじめ早稲田や慶応の同人雑誌の作家たちが一緒になって『世紀』が創刊され、浅沼は「或る感想」という随想を発表する。『青空』終刊後、久しぶりの文章である。『世紀』は短命に終るが、これが

縁で早稲田の尾崎一雄、浅見淵、丹羽文雄、慶応の蔵原伸二郎などと知り合う。

昭和十年一月、父から思いがけない就職口がもたらされる。鳥取における民芸運動の始祖となった吉田璋也が、鳥取に続いて東京銀座に出したたくみ工芸店の店長にならないかという話である。この店は昭和八年暮の開店だが、経営不振でこのとき閉店寸前に追い込まれていた。吉田に会った浅沼はこの仕事を引き受ける。《私は農民運動に入ったほどで土の香のする手仕事、郷土的なものが好きだった》と「私の歩んだ道」に書いている。たくみ工芸店は全国の新作民芸の品々を売り捌く店である。二十九歳になっていた浅沼はこれから約十年間、戦争激化のため店を離れるまでこの仕事に没頭、尽力するのである。前出の文章に続き、浅沼は書く。

《私は三人の男性店員とともに、休日もなく夜まで働いた。配達も自ら自転車でやり、売掛の焦付きの回収もやった。作家といわず全国の民芸の工人達といわず、店に持ちこまれる作品を一生懸命に売った。後に人間国宝になられた染の芹沢銈介、織物の外村吉之助、柳悦孝、陶器の船木道忠さん方、全国の陶器や染物や織物、金物などの作り手たちの援けになったと私は自負している。》

たくみ工芸店は出雲和紙なども扱い、野田本の名で知られる野田書房から出た川端康成の『禽獣』も浅沼がかかわったものであった。本の装幀のことでは太宰治や檀一雄、砂子屋書房の山崎剛平や尾崎一雄もよくやって来たという。

『青空関係書簡集』（平成四年三月、親和女子大学国文学研究室発行）には、浅沼が淀野に送った封書三十六通、葉書二十九枚が収められているが、昭和十一年四月二十八日の日付をもつ「たくみ時代」のものから始まっていて、彼の奮闘ぶりを伝えるものが少なくない。たくみ工芸店は浅沼の努力によって、二年めから黒字経営に転ずるのである。

妻の清子のほうは、洋装史の成功もあって昭和八年銀座資生堂から乞われて、その嘱託となる。こんどの仕事は

美容の概念について講演し、かつさまざまな化粧法について実演するものだった。好評で全国各地を巡演する。資生堂ではほかに宣伝のためのキャンペーンガール「ミス・シセイドウ」の養成や「資生堂チェンストアスクール」の講師を務めたりするが、昭和十四年に退職。退職金をもとでに四谷見付で駒井玲子美容室を開く。ここには藤原義江歌劇団のプリマドンナなども来て繁昌したらしい。が、翌十五年頃から体調をくずし、入退院を繰り返し、昭和十七年一月二十日、千葉県市川市の国府台病院で亡くなる。肺結核だった。過労によるところが大きかったのだろう。享年三十五。

浅沼の同年八月二十四日付淀野宛書簡には《昨日より今日、村岡兄と川治温泉にゆく、十年前清子と唯一の曽遊の地、感慨多く、生きてあらば語りたきこと多きものをと、かへすかへすも、先きにゆきしをなげき恨みたり》とある。

清子とのあいだには一女のあと一男をもうけており、鰥夫(やもめ)となった浅沼は小学生のふたりの子供の面倒をもみなくてはならなくなる。この頃、銀座や新橋の気に入りの鮨店などに子供をつれてよく出かけたという。これは浅沼が後に鳥取で郷土の食物の素材を生かした料理店をはじめることとなにがしかの関係はあろう。

翌十八年、井尻信子と再婚。浅沼を心配する母の世話になる見合い結婚であった。

敗色のつのる戦争の進展は、民芸品の製作はむろんのこと、その輸送もままならぬことになり、たくみ工芸店は開店休業の状態に追いこまれる。そうした浅沼を案じて昭和十九年、三高の友人の世話で理研工業に転職する。厚生係課長としてなかなかの高給を得たという。

昭和二十年八月十五日、敗戦。浅沼のような中途入社の者は当然退職となる。浅沼は東京の民芸店は古い従業員に任せて、自身は京都にあらたに民芸振興株式会社をおこそうとする。しかし翌二十一年一月、父の死により鳥取に帰ることを決意。約十年間たずさわった民芸の仕事からはなれることになる。

これより三年前、淀野に宛てた書簡（昭和十八年（推定）二月一日付）には次のようにある。

《隆兄

御丁寧におはがき有難う

言ふことはよく判つてゐるので、兄の心は充分嬉しく通じてゐる　弁解はいろいろあるし、前歴云々は、いつも福田が僕を、就職させてやると誘ひ出し乍ら、きまつて持ち出す言訳なので、あの後十年黙々としてやつて来た民芸の世界ですら小生が前歴の為に用ひられないなら　僕が全然未経験の世界で、一体誰が信用するといふのだらう、福田のいいかげんさ、友情の玩弄こそ反省さるべきで、被害者は僕ばかりではない、それは僕は酔つて言つたのではない、しかし、結局は兄の云ふ様に、僕が、自ら恃むところをなくした事にある、一時迷路にさまよひ、その後清子とのらりくらりの生活をつゞけ、いつのまにか自信を喪失し、勇気をなくした事にある、民芸への沈潜期間は福田は逃避だといふけれども僕にはまことによい思想なり人間なりの反省の期間であつた、これは自分でも感謝してゐるが、その間多少卑屈になつた事もまぬがれない、僕はこれを取り戻さうと思ふ、自らを正しくし、自らを謙虚にし、そして自らを恃む力を養はねばならないと、この度の事件で反省した次第だ、どうぞ僕の心の成長を助けてくれたまへ、たのむ、福田にも松田にも三段崎にも、皆にすまぬと思つてゐる、……》

理研工業に就職が決まる前の浅沼の置かれた状況や心境のよく伝わる内容である。文中の福田、松田、三段崎は三高のときの友達であろう。

十数年ぶりで郷里鳥取に帰った浅沼は不惑の年となっていた。彼は当初、鳥取の代表的な地方紙日本海新聞にむかえられようとするが結局かなわず、傍系の日本海文化協会に籍をおくことになる。ここは日本海新聞はもちろんすべての新聞を取り扱う販売店であった。給料は少なかったが、自由な文化活動を許された浅沼がまず手がけたのは、彼の豊富な人脈を生かしてのさまざまな講演会だった。

《私は好きな道とて燃えて活動した。いま覚えているのは京大の伊吹正彦、大山定一教授らの仏独文学、水稲直播を提唱した吉岡金市、除草剤を発明した京大の井上教授、家政学に新説を出した早大の今和次郎教授、日本茶道史を著わした京都の西堀一三、三高同級で京大の桑原武夫や大阪朝日の天声人語執筆の吉村正一郎その他名ある学者達の講演会を矢つぎ早にやった。》（「私の歩んだ道」）

そのほかにも長与善郎先生に文芸を聴く会、淀野隆三文芸座談会なども開いている。

昭和二十二年、新憲法下、さいしょの地方自治体選挙がおこなわれ、浅沼はこれにも乗りだす。鳥取市民同盟を結成してみずから幹事長となり、知事選、市長選に関与してそれぞれ民間人から当選者をだすことに成功する。自身も県議会議員選挙に立候補するが、これには落選している。新市長のもと、涌島義博、川上貞夫、吉田璋也ら三十人からなる文化委員会がつくられ、いちばん年少の浅沼が委員長となる。

この年十月には浅沼が編集兼発行人となって総合誌『月刊日本海－経済・産業・文化・生活－』が創刊される。《経済と産業に重点をおく新雑誌》（巻頭言「新しき出発に当りて」）でみずからも「鳥取県の産業構成」「鳥取県の農業概観」「県内工業概観」などを執筆するが、翌二十三年七月、第六号で終刊となっている。

昭和二十三年十月には文化委員会の最初の仕事として、市政六十年記念市民文化祭がはなばなしく開催される。前進座の公演、音楽会、大茶会、菊花展などさまざまな行事がおこなわれた。

はじめすこし張り切りすぎトバしすぎたきらいがあったかもしれない浅沼は、この年の暮、血痰を吐き入院、翌年手術を受ける。《妻清子にもらった形見かも知れない。》（「私の歩んだ道」）と書く。まだ結核の決定的な治療法のない時代で、二十五年に再入院。この頃、浅沼の生活は苦しかったようで、二十六年一月十五日付の淀野宛書簡には次のようにある。

《僕も順調だ、新聞社の方ももう首になるころだと思つて心配していたが、まあも少し安心して休めといってく

れるし、亡父の友人や生徒だつた人たちが、一口百円の醵出をしてくれて、二万円余りできて、（まだ、四、五万作るそうだ、）年末も年始も心配せずに人並に過した、もつとも酒は一滴もない、これは既に恩給組が多いので僕はすつかり恐縮して弱つて了つた、僕が元気ならこちらが救援しなければならない様な人たちで、僕の中学の恩師すらある、亡父や、恩師たちから鞭をくらつたような気だ。三月は君のおかげと、その後たくみがくれたりして、どうやら助かり、十二月からは、健保が切れて、医療費は私費負担で一寸困ることになるのだつたが、これで助かつた、人に助けてもらつてばかりだ、》

冒頭の新聞社うんぬんは、昭和二十三年末から浅沼は日本海新聞社に入社して論説委員を務めているが、病気もあってその期間は長くはなかったようだ。

昭和二十八年、ようやく病いの癒えた浅沼は鳥取市役所に嘱託として入り、翌年正職員となる。鳥取文化財協会のメンバーにも加わり、砂丘を文化財にしてもらうことや、久松山の史跡指定、樗谿神社の修築などにかかわる。昭和三十年、商工課長に就任。この課は観光行政も兼ねていて、浅沼は鳥取の土産品販売などにもアイデアをだして成功させている。同三十二年、皆生の国立療養所で胸部の再手術。翌年復職した浅沼は、かねてより計画を進めていた新市史の執筆に取りかかる。昭和十八年に刊行された「鳥取市史」が藩政時代の記述が中心になっていて、肝心の市政がしかれてからのことについてほとんどふれられていないことに強い不満を抱いていたからである。涌島義博、松本儀範、狩野喜道、浅沼による分担執筆であったが、涌島の発病により中断を余儀なくされる。涌島は日本海新聞の主筆を務め、「鳥取市民百年史」の著書もあり浅沼がもっとも頼りにしていたであろうと考えられる人物である。涌島は同三十五年死亡。

このアクシデントにもめげず同三十六年、浅沼は仕事を再開させる。この年、五十五歳になっていて定年退職をむかえるが嘱託として残り、新市史の完成に精魂を傾けるのである。

《図書館に籠って古新聞や郷土の出版物を読み且つ書写したが、これには徳永職男さんが好意的で、自由に棚から本も引出せたし、司書の荻原さんも鳥取県統計書を自由に見させてくれられた。県統計書など見るのは君が初めてだと云って喜んでくれられた。市の倉庫にも入って議会議事録を片っ端から通読した。これも私が初めてだったろう。夜は家にも持って帰ったが、そのため家ダニがわが家の座敷に移って往生した。

農水産と文化史は松本穣葉子が執筆し、教育の一部を狩野喜道さんが執筆したほかは全部私が書いた。他の多くの郷土史とは少々毛色が変って、市民生活の色の濃い、郷土愛の溢れたいい本になったと私は思っている。》（「私の歩んだ道」）

『市史 鳥取市七十年』は昭和三十七年十一月の刊行である。菊判で千ページをこえる堂々とした大冊で、浅沼が自負したとおり、今日でも評価が高い。

その頃、浅沼は民芸品の食器で鳥取の食材を生かした美味しい料理を食べさせる店をつくることを考える。吉田璋也らに相談して、民芸館に隣接する小料理屋を買いとり、吉田が指揮をとって民芸風に大改造してたくみ割烹店を開店させる。『市史』が刊行されたのと同年同月のことである。浅沼はいぜん市の嘱託として仕事を続けており、昼は市役所、夜はたくみの生活であった。

しかし、昭和三十九年には市の嘱託を退き、たくみ割烹店に専念することになる。

《漁港の魚屋は朝暗いうちにマーケットに来て卸すので、五時半には出て現金仕入をした。大口の買手が現金というのはあまりないので、魚屋のオバサン達は大へん喜んで、なにを置いても新しい地物をたくみに卸してくれるようになった。

夜は九時まで休日なしの働きだった。》（「私の歩んだ道」）

昭和四十七年、浅沼はたくみ割烹店の社長に就任。浅沼の陣頭指揮はその後も変わることなく続いたらしい。た

くみ割烹店はいまも創業時の場所にあって、鳥取の郷土料理を代表する店として盛業を続けている。

浅沼はそのかん、昭和四十六年、鳥取市文化団体協議会会長、市政懇話会の委員、同四十七年、鳥取文芸懇話会の会長となり、文字どおり鳥取文化をになう顔となる。同四十九年十一月、機関紙『鳥取文化』を創刊。この月、鳥取市文化団体協議会、鳥取市教育委員会共催の文化講演会に「青空」の仲間だった中谷孝雄、平林英子夫妻に伊藤桂一を鳥取に招く。浅沼は二日間にわたって土地の名所や旧跡を案内し、至れり尽くせりの歓待をしたらしい。

《お別れの日になった。浅沼は彼のやっていた「たくみ」という料理店でカニのご馳走をしてくれた。旅館で食べたカニよりずっとおいしかった。

食事が済み、私が別れを告げると、浅沼はいきなり両手で私の手を握りしめて、「またいつ逢えることか……」と、声をあげて泣き出した。私はそれを振り切るようにして立ち上ったが、彼は涙に濡れた顔をあげて、

「駅へはよう見送らないから。駅でまた泣きだしたりしたら困るからね」

こうして私たちは、別れたきり、それからまた久しく逢う機会はなくなったが、浅沼はその後毎年、秋になると鳥取名産の見事な柿を送ってくれるようになった。私が鳥取で、町の至る所に柿がたわわに実っているのを見て、

「この頃の子供はまるで柿を食べなくなったようだが、ボクは果物のなかでは柿が一番好きだよ」

と言ったのを忘れずに、思い出してくれてのことであったようだ。》

と中谷は「思い出の一端」（『さすらい人の風籟』収録）に書いている。

浅沼と中谷はこの後、昭和五十六年三月、大阪市南区中寺町の常国寺で催された梶井基次郎五十回忌の席でもう一度会うことになる。

浅沼は鳥取に帰ってから地方紙誌に多くの文章を発表しているが、昭和五十七年十一月、たくみ割烹店経営の体験から『鳥取の食文化』（郷土シリーズ第二十一巻、鳥取市教育福祉振興会）を書きおろして刊行する。著書とし

てはほかに昭和五十二年三月発行の伊谷ます子との共著『明治大正のころ』（郷土シリーズ第四巻）・『市史 鳥取市七十年』の一節から抜粋した昭和五十三年三月発行の『市政をめぐる人々』（郷土シリーズ第七巻）がある。

翌五十八年、たくみ割烹店の第一線から退き相談役となった浅沼は七十七歳となっており、《耳も遠くなり脚も弱くなって市民文化祭や展覧会、講演会にも出かけることが難しくなったので》（「私の歩んだ道」）、関係する各種の団体、委員会の役からも漸次退いてゆく。

昭和六十年十二月二十六日、肺癌のため、県立中央病院で死去、享年七十九。

浅沼の後半生は郷土愛に燃えて捧げた四十年ということが出来よう。

昭和三十七年、鳥取市芸術文化功労表彰、同五十三年、鳥取市文化賞、同五十四年、鳥取市特別功労者表彰などに輝いている。

平成二年六月、浅沼の文章や知友の追悼文などをあつめた『さすらい人の風籟』が浅沼喜実遺稿集刊行会から刊行されている。

（本稿を成すにあたって『さすらい人の風籟』に収められた諸文章―とりわけ竹内道夫氏の「鳥取文化の礎――浅沼喜実の生涯」「浅沼喜実年譜」に教えられるところ多く、また『赤脚子』（川上みち子編）を参考にしました。そのさいお世話になりました鳥取民芸美術館々長川上純子氏、兵庫県民芸協会の白石弘子氏に厚くお礼申し上げます。）